

第 13 回館長講座 ソンマ・ヴェスヴィアーナ：「アウグストゥスの別荘」？

2017 年 11 月 4 日

今回の写真と解説は、以下にほとんどを拠った。

- ・東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団編『アウグストゥスそれともディオニソスー別荘か神域かー』2006 年 2 月 1 日
- ・東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団編『ソンマ・ヴェスヴィアーナの遺跡発掘 研究プロジェクトの紹介と成果』2010 年 2 月 10 日

2001 年、ナポリ考古学監督局の発掘許可を得て、東京大学による総合学術プロジェクトが開始された。2006 年までの 6 カ年計画で、調査の対象は、ソンマ・ヴェスヴィアーナ市内のスタルツァ・デッラ・レジーナと呼ばれる地区にある通称「アウグストゥスの別荘」である。2006 年以降、発掘調査の許可は何回か更新され、現在も継続中である。

調査地は、ヴェスヴィオ火山の北斜面にそびえる外輪山ソンマのふもとに位置し、これまで幾度となく噴火の被害をこうむってきたところである。同様に被災地となったナポリ湾沿岸地域では、ポンペイのようにすでに 18 世紀前半から発掘調査が盛んに行われてきたのに対し、この一帯は、自然の変化や人間の活動がどうなっていったのかほとんど知られていない。

ヴェスヴィオ山の眺め ポンペイから

ポンペイからみるとちょうど日本の磐梯山の猪苗代湖側からの眺めと似ている。

ヴェスヴィオ山は北側はソンマ山と呼ばれる外輪山に囲まれています。英語で外輪山のことを *somma* といいますがそれはここに由来している。

ソンマ・ヴェスヴィアーナからはヴェスヴィオ本体は見えず、ソンマ山が見える。

宿舎・調査本部となっていた建物は、小さな領主館の一棟の 2 階と 3 階を借り、遺物の収蔵庫ともしていた。中庭を囲んで住居、教会もある。朝には教会の鐘が鳴り、なぜかそれに応えるように犬が吠えていた。2 回に食堂やコンピュータールーム、2 階と 3 階にシャワールームがあるが、大人数でも使えるように 3 階にはシャワーのためのボックスが 5 つくらい並んでいる。

宿舎から遺跡までは直線距離で約 3km、車で 10 分くらい。

発見の経緯と 1930 年代の発掘調査

この遺跡の最初の調査が行われたのは、1930 年代になってからである。農作業の最中に偶然、大きな壁体の一部が発見され、この辺りに重要な建物が埋まっているのが明らかとなったためである。

1934-36 年、南イタリア考古監督局総監アメデオ・マイウーリ指揮の下、考古学者マッテオ・デッラ・コルテによって発掘が行われ、壮大な建物の一部が発見され、高さ約 9 メ

ートルにもおよぶ遺構が保存されていた。発掘者たちの見解によれば、建物は 62 年の地震による被害の復旧作業がまだ終わらないうちに「79 年の噴火に伴う泥流」によって破壊されたのであるという。

出土した遺構の中でも最も壮観なのは、東西約 12m にわたって発見された「アーチや角柱による列柱廊」である。列柱廊は、3 つの壁龕によって装飾された煉瓦造りの壁と直角に交わっていた。それ以外にも、「円柱や大理石製の柱頭、モザイクの床、英雄のような姿をした人物の美しい彫像の断片、(中略) 壁や格間天井の彩色されたストウッコ」も発見されている。

当時の約 70 m² という狭い調査範囲にもかかわらず、遺構の壮大さや、その建つ位置は、初代ローマ皇帝アウグストゥスが最後の日々を過ごしたノーラの邸宅であると特定するのに十分な要素であるとみなされた。デッラ・コルテは、この遺跡の規模と豪華さ、および立地条件を考慮し、ここが初代ローマ皇帝アウグストゥスの死んだ場所である、という仮説を公表した。古代ローマの歴史家タキトゥスは、アウグストゥスが「ノーラ 近郊にて」息を引き取った、と伝えているからである。遺跡は、まさしくそのノーラ近郊に位置していた。試掘は、1935 年の春に資金不足によって中断を余儀なくされる。その後、本格的発掘を願うソンマ・ヴェスヴィアーナ市は、デッラ・コルテと協力してさまざまな方法で資金獲得を画策するが、いずれも実を結ばなかった。当時のイタリア元首ムッソリーニにまで資金援助を求める嘆願書を送付したが、その書簡はムッソリーニには届かなかった。

遺構は、調査を続けていく資金が滞ったため、1930 年代末までそのままになっていた。その後、第二次世界大戦が始まり、調査再開の目処が立たないまま、遺跡は完全に埋め戻されてしまい、「アウグストゥスの別荘」は、いつしか人々の記憶から消え去っていった。遺跡が再び人々の前に姿を現したのは、21 世紀に入って、東京大学が発掘調査を開始したとき、すなわち約 70 年後のことであった。

発掘開始前、この遺跡はアウグストゥスの死後、ポンペイと同じく紀元 79 年のヴェスヴィオ山の噴火で埋没したと考えられていた。しかし、堆積している火山灰などの分析により、472 年の噴火により壊滅したことがわかった。

472 年の噴火の噴出物によって、遺跡の建物はその高さの半分ほどが埋没した。噴火とともに 20km 近くの高さまで立ち上がった噴煙柱から降下した火山灰や小岩片が、建物の全域を 10cm ほどの厚さで覆った。その後、山腹部を広く流走した火砕流本体は建物には到達しなかったものの、それから派生した火砕サージの一部は建物をおそい、薄い堆積物を残した。これらの堆積物が倒壊した建造物の上に確認されるので、建物のかなりの部分は噴火以前にすでに廃墟に近い状態になっていたものと思われる。その後の降雨によって山腹に厚く堆積していた効果火山灰や火砕流堆積物は土石流となって山麓を覆い、遺跡の建物も度重なる土石流によっておよそ 5m の高さまで埋められた。

6 世紀初頭の次の噴火による降下火山灰と土石流堆積物によってそれまで地表に残っていた建造物の大部分は埋没した。6 世紀の噴火以降、最低 3 回の噴火の痕跡を確認できるが、

遺跡で見られる最新の噴火堆積物は 1631 年の大噴火によって形成されたと推定される。

2002 年 クルミヤイチジクの果樹園

発掘開始前 クルミヤイチジクの果樹園だったところに大きな壁体の残骸が少しだけ顔を出していた。

2002 年には 1930 年代の発掘のあとを掘り出した。

遺跡の床面までは現在の地表から 9 身性にも及ぶため、日本では許されない方法だろうと思いが、法（のり）をつけて掘り下げるのではなく、途中で中断を設けて掘り下げる方法をとっている。

彫像ペプロフォロスとディオニュソス像

2003 年度の発掘調査中には、2 体の優雅な大理石彫像が発見された。一体は、古代ギリシアの長衣（ペプロス）をまとった女性像（ペプロフォロス）で、もう一体は、古代ギリシアの神ディオニュソスを表した彫像であった。

彫像が現れたそのとき

2003 年 9 月 8 日、午後 4 時を少し過ぎた頃に彫像(ペプロフォロス) は約 2000 年の時をへだてて、南イタリアのまばゆい陽の光を再び浴びることとなった。作業員のアントニオやチーロと壁龕の前の掘削に取りかかったとき、削岩機によって崩れ落ちた土の向こうに白く輝くものが見えた。一種異様な光を放つそれは、私たちの注目を集めた。「出土」の瞬間である。しかし、まだこのとき、それが彫像の一部であるとは誰も思わなかった。即座に掘削を中止し、刷毛でその白いものを掃いてみると、なんだか「渦」がまいている。「これは、もしかして？」と思うものの、半信半疑の状態であった。「彫像ならばいいな」と思う気持ちと、「違うかもしれないな」という気持ちがまだ交錯している

小さな撥に道具を持ち替えて、慎重に掘り進めてみると、その「渦」が彫像の頭部の髪であるとわかることにそう時間は要らない。彫像が出てくれたらという希望が現実となって、目の前に現れ、全身身震いのする感動の瞬間であった。いまにも陽が暮れようとしている中で、その日の彫像の取り出しは諦めて、翌日への持ち越しとなる。

9 月 9 日。朝から眩しいくらいの青空のもと、調査が始まった。道具を撥と刷毛に持ち替えて、慎重に掘り進めていく。まず、頭の周りから土を取りほぐしながらすすめると、鼻の一部を欠くものの、ほぼ完全な形で顔が残っている。順々に胸部・腰部・脚部へと掘り進める。午後 2 時を過ぎると、ペプロフォロスの全身が見えてきた。その容姿は可憐であり、まだ土がこびりつく頬に触れると、冷たい白い大理石の中からぬくもりを感じとれた。

ディオニュソス像

第 1 室の床の上で、いくつかの断片に分かれた状態で発見された。断片の散らばり具合

から見て、この彫像ももともとは、高いところに設けられた壁龕に設暈されていたが、噴火直後の土石流の衝撃によって当時の床面に落下し、四散したものと考えられる。

それらに 1930 年代の調査で見つかった破片群を加えて結合することにより、全身のかなりの部分を復元することができた。ディオニュソスの頭部には葡萄の房と蔦の装飾が見られ、またその手には子豹が抱かれたかたちで表現されている。

遺跡にはレプリカが壁龕に置かれている。ペロポフォリスはほぼこの壁龕にあっただろうが、ディオニソスは推定位置。

愛知万博での展示

この 2 体は、地元ソンマ・ヴェスヴィアーナ市における修復が終了したあとの展覧会、その後の、2005 年 3 月に愛知県で開かれた「2005 年日本国際博覧会愛・地球博」における遺跡出土の彫像 2 体と柱頭の展示、同年 11 月に東京大学総合研究博物館で開催された「ディオニュソスとペプロフォロス 東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果」展、で日本にも紹介されている。

発掘の様子

遺構内に重機が入り、また固い火山噴出物を掘削するのにツルハシのみならず削岩機も使っていた。

2003 年 7 月から 3 年間にわたり前田建設工業株式会社より寄附講座が提供され、発掘調査を軌道にのせることができた。遠くからは前田建設の高いクレーンが目印になる

circum vesuviana 鉄道 ヴェスヴィオ周遊鉄道

遺跡を訪れるには、ナポリから電車に乗らなければならない。ヴェスヴィオ山周辺には、ヴェスヴィオ周遊鉄道が走っている。ナポリ起点に複数の路線があり、間違えないようにしなければならない。ソンマの遺跡へは、オッタビアーノ経由サルノ行きに乗る。ナポリ中央駅から電車で揺られること約 30 分、右手にヴェスヴィオ山を眺めながら座っていると、ヴィッラ アウグステアにつく。この駅は、2016 年 7 月までメルカートベッキオと呼ばれていた。

2005 年までに調査された範囲

公的な性格をもっていたであろうと想定される巨大な広間、四連角柱群によって支えられ、広間中央を東西に横切る荘重な連続アーチを見ることができる。1930 年代に発見された三つのニッチをもつ東壁と対称をなす西壁も発見されており、この両壁体が広間の東西端を形成するかたちとなっている。

一方、広間の北端は、高価な大理石製円柱の列柱によって仕切られ、大きく開かれていた。広間の床面は、もともとは全面モザイクによって装飾されていたとみられるが、それ

は後代になって部分的に改変されたらしく、現在ではコッチョペスト（レンガや瓦のかけらを含んだモルタル）仕上げが残る箇所もある。

壁龕を有する壁と大理石列柱

第1室の西端を画する壁である。上下二段にわたって抉りが入れているが、下段は、本来貫通しており隣接する部屋との連絡が図られていたが、その後一つを除き閉塞された。上段はいずれも壁龕であり、3基あるうちの、向かって左端の壁龕から先述のペプロスを着た女性像が発見された。

手前に見えるコリントス式の大大理石製柱頭は、その製作様式から2世紀のものと考えられ、建物の創建時期を測る一つの根拠となる。

北から南を見る 装飾門

ソンマ山を見越すところに装飾門が建つ。床の深さに注目。

第4室の南端の壁には、漆喰装飾によって囲まれた大きな扉跡が発見された。ペディメント（三角破風）をいただき、多色漆喰によって豪華に装飾された正面玄関部があり、広間が往時に有していたであろう荘厳さをひととき強調している。

上にしつらえられた破風の中央には、月桂樹で編まれた市民冠を摸した漆喰レリーフがある。その両横、さらには角柱によって支えられた長押しには、豊かな実りを象徴するようさまざまな装飾が漆喰レリーフで表現されている。

舗装された地面

広間から装飾門をぬけると、そこはもう屋外である。表面が平らに加工された石を敷き詰めて舗装された面が広がる。それぞれの石の間はモルタルによって目地止めされており、仕上げの丁寧さがうかがえる。この舗装された面は、道であろうか、それとも広場であろうか。

建物の創建時よりも後に造られたアプシス

Area3の西部には、建物の創建時よりも後に造られたアプシス（半円形の構造物）が見られる。アプシスは、造られた当初は大きなアーチ状の開口部を通じて矩形の部屋とつながっていたが、その後開口部が閉じられたときに完全に遮断された。この閉じられたアプシス内に捨てられた土からは、獣骨、貝、土器、ガラスなど大量の生活残滓が見つかった。

特殊な構造の広間(第1室と第4室)

第1室を当時の目線で北から眺めると、豪華な小アジア産の色大理石で作られた列柱が並ぶ高い基壇によって周囲から隔絶されている。その向こう側に壮大な連続アーチで天井が支えられた広間が広がる。壁画によって装飾された両側の壁に穿たれた壁龕からは、白

く輝く秀麗な彫像がその空間を見下ろしている。荘厳さが幾重にも演出されたこの広い空間は、部屋の奥に設けられた扉を介して建物の南側につながっていく。当時は、この扉の向こう側にどのような風景が、ヴェスヴィオ山を背景にして広がっていたのであろうか。

崩落した壁

部屋の中には所々に崩れ落ちた壁の大きな破片が埋もれている。しかし、現在までのところ、はっきりと天井や屋根を構成していたことがわかる部材は見つかっていないことから、噴火によって被災する以前に、すでに建物の大半の部分は朽ち果てて、屋根などは崩れ落ちた状態であったことが推定される。当時は、建築部材のリサイクルも一般的であったため、この遺跡からも多くの部材がすでに運び去られてしまっていたのであろう。

第5室 2014年の写真から

第6室 溜井戸の発見

第1室から一段下がったレベルに、深さ約4mの水槽のような遺構が出土した。建物の創建時から存在するのではなく、本来の公共的な役割を終えて、工房のようなものにその機能が変わった頃に造作されたようで、この北側の、さらに一段下がった面に整然と並べて地中に埋設されている大甕（ドーリア）群と関連する施設であるかもしれない。

第7室

第1室の北側の、一段下がった部分は、東西に翼を広げるように建物が広がっていく。東側には大きなアプシス（後陣）を有する部屋が作られている。この部屋の北側は、連続する開放的なアーチで仕切られており、ある種、回廊の一部のような趣を呈するが、東端は、大きなアプシスによって閉じられている。このアプシス内には、見事な壁画が遺されている。

第7室の後陣に遺る壁画

アプシス（後陣）内のクーポラ（丸天井）部分は、肋条を有する傘、あるいは二枚貝の内面を模した装飾が施されており、そのクーポラ下半部に、ギリシア神話に登場するヒポカンポス（半馬半魚の海馬）や下半身が魚である海のケンタウロス、また、それらの背に乗るネレイデス（海の妖精）あるいはエロース（？）などが波間に漂うように描かれている。

2009年の壁画では色が落ち、緑のコケも生えてしまっている。

第10室のモザイク床

ここには、白黒の伝統的な幾何学模様を中心としたモチーフによって装飾された大理石モザイク仕上げの床が遺されている。部屋の中央部分は、色大理石によって矩形に飾られており、そこには彫像や水盤などの飾り物が置かれていたのかもしれない。

第 10 室の後陣

上述のアプシスを有する部屋（第 7 室）とは、細長い小部屋を挟んで、並ぶように作られた部屋であり、この部屋にも同じようにアプシスがしつらえられている。アプシス内は、やはり全面にわたって壁画で彩られているが、第 7 室で見たような具象的なモチーフは描かれていない。

アプシスの下半分の壁画に残る細かい刺突痕は一番上の彩色のはがれたところに見える。下にある彩色壁画に上塗りするのに、漆喰のつなぎをよくするための刺突痕だろう。

部屋に残された生活用具 第 10 室奥

奥まった部屋の片隅に置かれたままになった状態で出土したアンフォラ（液体の運搬や保存に用いられた大型の壺）と大型の鉢のほかに、編みカゴや木製家具の朽ち果てた痕跡も見つかった。噴火によって埋没する直前まで、この建物が使用されていた証拠の一例である。

第 10 室の壁画

この建物は、本来すべての部屋が彩色漆喰や壁画によって彩られていたのであろうが、そのほとんどは剥がれ落ちている。唯一、この第 10 室にのみ壁面の装飾が良好に遺されている。上半部は、あたかも外界が見えているように描かれており、鉢植えが描かれた両脇には鳩が留まっている。その横ではモール状の植物が風にそよぐ様子もうかがえる。一方、壁の下半分には、大きな色大理石のパネルを模した彩色が施されている。

第 12 室の埋甕群

便宜的に第 12「室」と呼んでいるが、本来は中庭のような、地面が広がるオープンスペースであったであろう。第 6 室や第 10 室からはさらに一段下がったところにあり、ドリウムと呼ばれる液状のものを貯蔵する大きな甕が、多数埋められた状態で発見された。

それぞれのドリウムの容置はおよそ 500 リットルであり、大量の液体が保存されていたことになる。

本来、この建物が建てられた時には存在しなかった施設であろうが、時の経過とともに建物の利用形態も変わり、噴火に見舞われる直前の頃には、ワインの醸造施設として使われていたのかもしれない。

遺跡の全容

遺跡は 1920 年代に発見され、当時は、古代の文献に記載されていた、初代ローマ皇帝であるアウグストゥス（前 63～14）が息を引き取った別荘がこの遺跡に該当するのではないかと考えられていた。しかし、発掘調査の結果によると、現在までのところ、残念ながらア

ウグストゥス帝との直接の関係を示すものは発見されていない。

未だその一部しか明らかではないが、建物の建築時期やレイアウトあるいは秀麗な装飾要素などから、この遺跡が、何らかの宗教的な性格を有する、この地域の公共施設として建てられ、その後何らかの工房へと変化した可能性が高まっている。